

143 回大会

2011 年11 月25 日 (土), 11 月26 日 (日), 大阪大学

口頭発表, ポスター発表, ワークショップ要旨

The 143rd Meeting of LSJ

Osaka University, 25-26 June, 2011

Abstracts of oral presentations, poster presentations, and workshops

《口頭発表 Oral presentations》

演算子移動の精緻化と連鎖形成

本多正敏

否定辞を越えての A-bar 移動において非文法性が生じる場合があり、これは否定の島 (Negative Island) の効果と呼ばれている。本研究では、否定の島から移動できる要素と移動できない要素の統語的・意味的特徴に基づく分析を提案し、否定の島の効果が生じる事例を考察する。主張は次の二点である。第一に、否定の島からの要素の移動は、DP 連鎖形成により認められる。第二に、否定の島の効果は、否定辞による QP 連鎖形成の阻止効果により生じる。具体的には、Rizzi (2004) の A-bar 素性に基づく Relativized Minimality (以下、RM) を採用し、Q 素性を持つ要素が同じ Q 素性を持つ否定辞を越えて移動し、QP 連鎖が形成される形状は RM 違反であると提案する。この提案に基づいて否定感嘆文・否定分裂文における否定の島の効果を考察し、これらの構文でも RM 違反による非文法性が生じることを示す。

カクチケル語における項削除の可否について

大滝 宏一
杉崎 鉦司
遊佐 典昭
小泉 政利

日本語とスペイン語を区別する特徴として、「項削除」の有無がある。なぜ日本語は項削除を許しスペイン語は許さないのかという問いに対し、2つの分析が提案されている。一つは、自由語順を持つ言語のみが項削除を許容するという「自由語順分析」であり、もう一つは、動詞が主語・目的語との一致を示さない言語でのみ項削除が可能であるとする「一致分析」である。本研究は、カクチケル語の分析から、この2つの分析の妥当性を検討する。カクチケル語は空主語・空目的語の生産的な使用を許す上、VOS・VSO・SVOなど多様な語順を示し、さらに動詞は主語・目的語と一致する。カクチケル語母語話者から得られた判断から、カクチケル語は空主語・空目的語のいずれにおいても「ゆるい同一読み」を許さず、従って項削除を許さないことが判明した。この発見は、「一致分析」の方がより妥当であることを示し、項削除の言語間変異に対して新たな知見をもたらす。

日本語における非顕在的 wh/ focus 移動と Relativized Minimality

前田 雅子

日本語では、焦点要素と疑問詞が共起する場合、焦点要素が疑問詞に先行することができない。この事実に対し、Tanaka (1997)は、表層構造の線形順序において A'-依存関係が交差してはならないとする the Linear Crossing Constraint (LCC)を提唱した。本発表では、この LCC 効果を統語的に説明することを試みる。具体的には、(i) 階層化された CP/vP 構造が存在する、(ii) 顕在的なかき混ぜ移動は非顕在的 wh/ 焦点化移動に先行する、(iii) 移動は統語派生の途中で適用される Feature-based Relativized Minimality に従うと仮定することにより wh 句

と焦点要素の介在効果を分析する。さらに、「こそ—けれど」や「さえ—ば」などの焦点の呼応関係が *wh* の島に従うのに対し、*wh* 句は呼応要素を越えて主節の作用域を取れることも同分析により説明できると主張する。

TP 領域内の Focus Phrase : 日本語 *Wa* 助詞に関する一考察

田中秀治

Rizzi (1997) の分裂 CP 仮説では、Focus Phrase (FocP) が CP 領域の一部を構成すると想定されている。本研究の目的は、Chomsky (2008) のフェーズ理論を背景にして「FocP は、命題を表示する統語領域内、すなわち、TP 領域内の機能範疇のいずれかを拡大する形で投射される」と提案することである。この提案においては、FocP は、指定された範囲内での機能範疇、例えば NegP を任意に補部として取るため、柔軟な分布を呈することになる。この FocP の「分布上の柔軟性」を検証するために、日本語 *Wa* 助詞に関わる現象を中心に提起して、その統語的・意味的振る舞いに対して、本研究の仮説がどのような予測を提供するかを述べる。特に、Kuno (1973) の言う *Wa* 助詞の「対照」の意味は、命題を「前提部」と「変項」に分割し、かつ、「狭義の焦点」を創出するという何らかの統語的機能から派生されるべきものであり、その両方の機能を果たす装置として「柔軟な FocP」が妥当であることを示す。

日本語における名詞句の発達過程と機能範疇

團迫雅彦

日本語を母語として獲得する幼児は、修飾要素を含む名詞句に関して二種類の誤用をすると報告されてきた。一つは「デンシャ ホン」のように修飾要素が名詞の際に「ノ」が省略されている場合である。もう一つは「チイサイ ノカラス」のように修飾要素が形容詞であるときに「ノ」が過剰に付加されている場合である。本研究では幼児発話を縦断的に調査し、これらの誤用がいつ、

どのように現れるのかを観察した。その結果、一方の誤用が多く観察される時期にはもう一方の誤用がほとんど観察されないことが明らかになった。こうした発達過程に見られる特徴は、異なる二種類の名詞修飾を区別しておらず、どちらか一方のタイプの名詞修飾を広く使用していることから生じると思われる。そこで本研究では日本語の DP 構造に関して二種類の主要部 D を仮定し、幼児は主要部の形態とその機能を十分に対応付けができないことから二種類の誤用が起こると主張する。

本当に 2 種類の to が存在するのか?—制御タイプの to と繰り上げタイプの to

野村忠央

最近の通説として、Chomsky and Lasnik (1993), Stowell (1982), Bošković (1997), Martin (2001)などは、不定詞標識 to やその時制には、それぞれ「制御タイプ」(=[未実現時制](Unrealized Tense))と「繰り上げタイプ」の 2 種類があると主張しているが、本発表ではそれとは異なり、「不定詞標識 to」にも[非定形時制]にも 1 種類しかないと主張する。

その根拠となる経験的事実として、本発表では「不定詞標識の to の後の VP 削除」について論ずる。Martin (2001)は「制御タイプの to」の後では VP 削除が可能であるが、「繰り上げタイプの to」の後では VP 削除が可能ではないとして、そのことが「2 種類の to」や[未実現時制]を仮定できる根拠になると主張している。しかし、本発表ではどちらのタイプの to であっても「統語論的には」VP 削除が可能なのであって、但し、それは「機能論的条件」が課された結果、容認性に差異が生じていると結論する。

否定の種類と統語構造

大関洋平

これまでに確立されてきた否定の種類として「構成素否定(Constituent

Negation; CN)」「文否定(Sentential Negation; SN)」「メタ言語否定(Metalinguistic Negation; MN)」の3タイプが存在する(Horn 1989, Horn & Kato 2000)。本発表では、まず Boeckx (2008: Ch4)で提案されたアイデアに基づき、理論的な観点から否定辞(Neg)が VP(CN), IP(SN), CP(MN)の統語領域に並行して分布するシステムを提案する。そして経験的な観点からも、本提案が通言語的な観察により裏付けられることを確認した後に、3タイプの否定の種類における(i)NPI 認可と(ii)否定のスコープの事実が正しく予測されることを示す。最後に、否定演算子および Horn(1985)で主張された「語用論的多義(pragmatic ambiguity)」に対する帰結と、機能範疇の投射に関わる理論的含意を述べる。

On the Highest Subject Restriction in modern Irish

Dónall P. Ó Baoill

Hideki Maki

McCloskey (1979, 1990) argues for the Highest Subject Restriction (HSR) on the distribution of resumptive pronouns based on languages such as Irish, Hebrew, and Arabic. This paper examines the HSR effect in Irish, and shows that given a proper context, it does not hold in Irish, contrary to what has been reported. We suggest that the difference between Irish and other languages with the HSR be attributed to the fact that Irish does not have EPP requirements, as McCloskey (1996) proposes, while the other languages which have a fully grammaticized resumptive strategy do. As a consequence, the HSR does not apply to Irish in the way it does to the other languages.

統語操作と語彙的緊密性の関係について

西牧和也

語の内部に統語操作が適用されないことは、語彙的緊密性の原理 (the Lexical Integrity Principle (LIP))と呼ばれ、語の決定的特質とされているが、Kageyama

(2009)は、日本語のデータから LIP の問題点を指摘している。Kageyama (2009) は、従来、LIP の違反を導くとして一括されてきたものを、照応などのように語の内部情報を統語的に分析するものと、削除などのように語の内部構造を統語的に破壊するものに峻別し、後者のみが LIP に違反するものとしている。本発表では、英語にも、LIP に関して同様の問題を提起する事例が存在すること、そして、それらも Kageyama (2009)に従って説明が可能であることを指摘し、Kageyama (2009)の LIP に関する分析は通言語的にも妥当で、自然言語の普遍的特性の一端をとらえたものであることを示す。

動詞的名詞の前に生起する名詞句のふるまいについて：

「NP の研究」対「NP 的研究」

大久保龍寛

坂本暁彦

動詞的名詞 (VN)と呼ばれる名詞は、項構造のレベルで目的語 NP を選択し (cf. Grimshaw (1990))、より大きな名詞表現 (「NP の VN」)を形成することができる (e.g. 物理学の研究)。しかし、同じ VN が用いられているものの、項構造では形成不可能な名詞表現 (「NP 的 VN」)が存在する (e.g. 物理学的研究)。本発表では、両名詞表現の間に容認度の差があることを指摘した上で、この差が以下の二つの主張から導かれることを示す。(i) 「の」とは対照的に、「的」には文脈により意味が指定される語用論的スロット R (R) (西山 (2003))があるため、「NP 的 VN」という名詞表現では、NP と VN の関係性が語用論的に決定される。(ii) このような R を持つか否かという違いは、「NP の」が VN の項として、「NP 的」が VN の付加詞として機能するという形で、統語的にも反映される。

英仏日語における、否定疑問文に対する応答のゆれ

亀山里津子

否定疑問文に対する応答は各言語によって様々であり、英語は”Yes, I can./No, I can't.”のように”Yes+肯定文/No+否定文”、日本語は”はい+否定文/いいえ+肯定文”、仏語は”Si+肯定文/Non+否定文”と表せる。しかし、今回筆者が母語話者に調査を行ったところ、これらの基本形とは異なる応答（ゆれ）が各言語で確認された。例えば、英語では”Didn't you go out with anyone last night?”に対して”No, I went out with Mary.”という”No+肯定文”を認められる場合がある。しかし、調べた限りでは否定疑問文の応答に関する先行研究にこのようなゆれの回答を考慮したものではなく、それらの提示する応答システムではこの現象を説明することが出来ない。そこで本稿では、ゆれの現象を説明できるよう、否定疑問文の応答システムを再考する。

現代日本語コ・ソ・アの二層的分析

－現場指示系と観念指示系の分離とその帰結－

小川典子

野澤元

従来の研究では、現場指示と観念指示の一方の用法におけるコソアの使い分けを説明し、それを他方に対応づけてきた。本研究では、これら二つの用法を分離しつつも共通の原理でその全体像を説明する。ある対象を指す指示詞は、話し手からみたその対象と他の対象との対比に基づき選択される。この対比には知覚の容易さによるものと顕在性によるものがあり、二つの用法では基盤となる対比の優先順位が異なる。つまり、現場指示では知覚の容易さが一次的な対比となり、容易な対象にはコソが、困難な対象にはアが用いられる。さらに、知覚が容易な対象の中で、顕在性が二次的な対比となり、顕在的な対象にはコが、非顕在的な対象にはソが用いられる。観念指示では、このような対比の優先順位が逆になる。

現場 [ア← (低) 知覚の容易さ (高) → [コ← (高) 顕在性 (低) →ソ]]

観念 [[ア← (低) 知覚の容易さ (高) →コ] ← (高) 顕在性 (低) →ソ]

近接性を表す日英語の形容詞と前置詞と名詞の文法化についての統語的考察

小川芳樹

near と next には、near / next him のような用法 1 と、near / next to him のような用法 2 がある。このうち、少なくとも用法 1 の near は、前置詞である (Quirk, et al. (1972))、他動形容詞である (Maling (1983))、空の前置詞を伴う (非対格) 形容詞である (Kayne (2005))、などの諸説があるものの、定説はない。

本発表では、COHA の検索結果等をふまえ、near / next の範疇性の通時的変化について、以下を主張する。(A) near は、用法 2 を減らして、前置詞化しつつある、(B) next は、用法 2 を増やし、用法 1 を減らして、他動形容詞から非対格形容詞に変化しつつあるが、前置詞化はしていない、(C) near の前置詞化は、(i) [+gradable]素性の消失 (Maling (1983))、(ii) 結合価の減少 (Cardinalletti and Giusti (2001))、(iii) 構造の単純化 (Roberts and Roussou (1999))、(iv) 機能範疇化 (Baker (2003))を伴う複合的な統語変化である。

また、日本語の「近い／近く」の範疇についても、以下を主張する。(D) 「近い」には非対格形容詞用法と後置詞用法がある、(E) 「近く」は、AP の内部構造と DP の外部構造をもち、名詞化しつつある形容詞である。

身体部位名詞を伴う再帰表現の受動文とその認可条件

小葉哲哉

「手を振る」「髪をとかす」のような身体部位名詞をヲ格目的語にとる再帰表現は、直接受動文に生起できないとされてきた (例：*手は彼によってさかんに振られている (仁田 1982))。しかしその一方で、再帰表現の受動文が実際に使用されている事例が、いくつかの先行研究で観察されている (工藤 1990, 細川 1990 など)。本発表では、当該受動文が容認可能となる条件を意味論的観点から

明らかにする。具体的には、再帰表現の受動文は、□提示文としての談話機能によって認可されるタイプと、□「発生状況描写文」(尾上 2003)としての構文的特性によって認可されるタイプが存在することを主張する。これらの構文的・談話機能的特性は共通して、動作主を意味的に背景化し、身体部位を独立した実体として解釈することを可能にする。一方で、2つのタイプの受動文が、動作指向か結果指向か、という述語の特性に対応することも明らかにする。

英語結果副詞の事象完結一時取消機能について

鈴木博雄

ある種の動詞と関わることにより、事象形成後の目的語等の結果状態を叙述する結果副詞 (resultative adverb) (e.g. He grows chrysanthemums marvellously.) について、Wickboldt (2000) による「事象完結一時取消機能」(以下、「取消機能」) に基づく説明の有効性について論じる。第1に、Ernst (2000) の様態規則 (manner rule) における「比較」の概念が、結果副詞に見られる話し手の主観的判断を反映させ易い傾向 (cf. Broccias (2008)) を裏付け、延いては、同副詞の「取消機能」を有効に説明するための前提となっていることを論じる。第2に、影山 (1996) の結果構文の概念構造に基づき、結果副詞が関与する文の概念構造を提案する。第3に、結果副詞に適用される「取消機能」が、結果述語には適用され難いことについて、概念構造における原因事象と結果事象の「発生上の時間差」に着目した理由づけを行う。

英語の動詞連続構文について

森下裕三

以前より、英語は動詞連続構文 (Serial Verb Construction) が存在しない言語であると考えられてきた (e.g. Baker 1989)。しかし、西アフリカ、オセアニア、東南アジアなどの動詞連続言語の研究を見る限り、動詞連続構文の定義は一貫し

ておらず研究者によって異なっている。本研究では、Foley and Van Valin (1984) や Van Valin and LaPolla (1997) らが提唱する RRG の枠組みから、英語にも動詞連続構文が存在すると主張する。

本研究では、以下に挙げる 2 種類の構文を英語における動詞連続構文とする。i) 定形の移動動詞 (e.g. *go*, *come*) に *-ing* 形という非定形の動詞 (e.g. *running*) が後続し、2 つの動詞の主語が一致する構文。ii) 定形の移動使役動詞 (e.g. *take*, *bring*) に *-ing* 形という非定形の動詞 (e.g. *flying*) が後続するが、2 つの動詞の間に入る名詞句が定形の動詞の目的語であり非定形の動詞の主語でもある構文。これらの構文を他言語の動詞連続構文との比較を通じて議論する。

モンゴル語の主題に関する一考察 — 定義型主題を中心に —

サイシャラト (賽希雅拉図)

これまでに、モンゴル語の主題マーカー「bol」に関する研究は数件あるが、モンゴル語の「*gejU*」「*gesen bol*」「*gedeg bol*」の主題提示機能および、その使い分けに関する研究はまだない。「*gejU*」「*gesen bol*」「*gedeg bol*」は日本語の「って」「とは」「というのは」に意味用法が近い。本研究は、「*gejU*」「*gesen bol*」「*gedeg bol*」に主題提示機能があることを主張する。これらによって提示される主題を定義型主題と呼ぶことにする。また、「*gejU*」「*gesen bol*」「*gedeg bol*」の同異を明らかにするために、その主題提示機能以外の意味用法も適宜考察する。

フィンランド語における出格補部の目的語性

太田樹

フィンランド語の 15 ある格のうち、出格は主に「～から」という意味を表わす場所格である。動詞がとる項としては「副詞補部」という位置づけにあり、目的語とは区別される。しかし、出格補部の一部は目的語に近い性質を持って

おり、特に分格目的語との境界は意味機能の点では絶対的なものではなく、両者は連続的だと考えられる。

動詞句が動詞由来名詞を主要部とする名詞句になった場合、目的語は属格で、場所格名詞はその格のまま引き継がれる。しかし、動詞句では分格目的語だった名詞が、名詞句では属格ではなく出格になる例が数多くある。また、受動過去分詞は通常、動詞句で目的語に相当する名詞を修飾し、場所格であった名詞は修飾することが出来ないにも関わらず、一部の出格補部であった名詞は修飾される。本発表では、これらの事象から、出格補部と分格目的語との近接性と、出格補部の目的語性を論じる。

タラウド語における結果・継続アスペクトを表す接頭辞 UA-の分析
—継続アスペクトとの相違—

内海敦子

インドネシア国スラウェシ島北部州で話されているタラウド語は、オーストロネシア、西マラヨ・ポリネシア語族に属する言語である。タラウド語の動詞を形成する base には特に多くの接辞が付加されるが、その多くにおいて非過去形と過去形の二つのテンスの他に、継続アスペクトの形態を持つ。これに加え、動詞の base に接頭辞 UA-が付加した形態も継続アスペクトや状態アスペクトを表す。この UA-が付加した動詞は、継続アスペクト似た意味的特徴を持つ。本発表では継続アスペクトと比較することで UA-形動詞の機能を分析した結果、以下の結論を導き出した。第一に UA-形は第一に動作動詞について「動作が発話場面では観察されないがその結果が観察される状態」を表す。第二にその他の動詞について「ある状態が発話場面の眼前に存在する一つ手前の段階にある」ことを表す。

インドネシア語における受動文としての ter-構文の意味役割

リズキ・アンディニ

インドネシア語では di-接頭辞（以下 di-構文）、ter-接頭辞を付ける（以下、ter-構文）受動文がある。ter-構文は di-構文と交替できる場合もあるし、交替できない場合もある。直接的に di-構文と交替できない場合、使役マーカ-kan 接尾辞と結合された di-構文（di-kan 構文）と交替する。交替できるものは、意味構造に「主語そのものは動作や行為を受ける」ということであり、さらにその動作・行為は「働きかけ」として考えられ、それによって対象になるものには変化が生じ始める。この意味構造まで、つまり「(動作の) 働きかけ」は、di-構文で負担させる。また、それによってなされた「(変化) の結果」が持続している場合、ter-構文に表される。つまり、「結果の継続」は di-構文と ter-構文の相違点として考えられる。したがって、di-構文は「変化の受動文=Passive of Change」である一方、ter-構文は「継続的受動文=Passive of State」として表せる。「変化の受動文」がまず起きて、そこから結果が生じ、さらに持続している場合、「継続的受動文」は派生する。

古典ナワトル語の多重人称標示の形態統語論的解釈

佐々木充文

複統合的 (polysynthetic) とされる言語をはじめ、述語が多重の人称標示をもつ言語において、人称形態素を代名詞と考えるか一致要素と考えるかという問題は、当該言語の文法記述の根幹にかかわる問題である。

本発表の目的は、複統合的言語であるメソアメリカの古典ナワトル語 (Classical Nahuatl) の人称接辞が、従来主張されてきたような代名詞的要素ではなく、一致要素もしくはそれに類する述語の形式的素性の発現形であることを示すことである。本発表では、4 種類の人称接辞（動詞の主語人称接辞、動詞の目的語人称接辞、名詞の主語人称接辞、名詞の目的語人称接辞）の形態統語論的性質を検討し、同要素の性質が、分布・機能・形式の各点において、複統合的言語の

人称形態素を一致要素と考える Baker (1996) および Evans (1999) その他の分析を支持するものであることを指摘する。

アラビア語チュニス方言の条件文

熊切拓

本発表ではアラビア語チュニス方言における条件文を取り扱った。資料に基づきその構造を分析し、次のように結論した。

□条件節の導入要素（「もしも」に当たる要素）の一部として用いられるコピュラ動詞を起源とする不変化辞が、それ単体で「もしも」を意味するように変化しつつある。

□条件節のみに現れる例外的なコピュラ動詞（本来はコピュラ動詞ではない動詞）は、この条件節の導入要素であるコピュラ動詞起源の「もしも」との混同を回避するために用いられている可能性がある。

□このコピュラ動詞起源の不変化辞を含む条件節は、この言語におけるモダリティ辞を含む文構造と同一の構造を持つことがある。

□事実と反する条件文の主節に現れる導入要素は、条件文以外ではモダリティ辞として用いられる。この導入要素の出現は単に条件節の導入要素との自動的な共起関係によって規定されているのではなく、その表現性も深く関わっていると考えられる。

日本手話の口型に見られる極性表現

松岡和美

南田政浩

矢野羽衣子

日本手話における非手指動作（眉・目・あごなど手以外の動き）の一つである口型には、様々な文法的・機能的特性が存在することが指摘されている（松

岡他 2010、木村 2011)。本研究では形容詞と共起する極性表現を表す口型について二つの観察を報告し、その言語学的意義について考察する。インフォーマントは日本手話を母語とする、デフファミリー出身成人ろう者男女である。(1) 極性と強調の間に文法的に密接な関係があることが、音声言語・手話言語に関わらず、語順や口型などに観察できること (2) 極性という概念を「認知的極性」「態度的極性」に分類する Saury (1984)の分析に対して、日本手話の非手指動作(口型・眉の動き)が経験的な支持を与えることを示す。本研究で示された口型の極性表現の性質は音声日本語に見られるパターンとは大きく異なることから、日本手話が独自の文法的特性を持つ言語であることが強く示唆される。

日本手話の社会的ダイクシス

神庭真理子

日本手話は日本のろう者コミュニティで使用されている自然言語である。手指等で発信し視覚で受信するモード故、手話言語は、手話空間(発話の際手指を動かす、話し手の身体周辺の空間)を言語のシステムとして利用する。

日本手話の研究において、手話空間の利用は専ら「動詞の一致」の議論で取り上げられるのみであったが、小藺江・木村・市田(2003)は、代名詞の使用例の分析の結果、手話空間内に文法的機能を担う8つの空間が存在することを明らかにした。しかし、これに似た現象が、代名詞ではない名詞の位置にも観察される。例えば、ある語の位置が話し手の身体の近くであれば、その語の指示対象に話し手(あるいは話し手の身体の指示対象)が親しみを持っていることが含意される。同様に、語の位置は上下関係と物理的距離の遠近も表す。

本発表では、多様な使用例に基づき、名詞の手話空間内での位置が社会的ダイクシスを表示する機能を持つことを明らかにする。

「のだ」文と分裂文の派生再考

五十嵐啓太

志澤剛

三上傑

日本語の分裂文(e.g. 太郎が食べたのは梨をだ)及び「のだ」文(e.g. 太郎が梨を食べたのだ)の派生に関して、Hiraiwa and Ishihara (2002)は、前者が後者から派生されると主張している。本発表では、この分析の統語的・機能的な問題点を指摘し、両構文には派生関係がないことを結論付けた上で、日本語学での知見を取り入れつつ、新たに両構文の派生を提示する。具体的には、「のだ」文は「主題一題述」の機能を持つコピュラ文から主題部の削除を介して派生するのに対し、分裂文は「のだ」を伴わない通常文(e.g. 太郎が梨を食べた)から、要素の焦点化および残留部の話題化を介して派生されると主張する。そして、本発表が提示する派生は、Hiraiwa and Ishihara の分析に内包される問題に対して原理的な説明を与えられるということを示す。

「息子は明日運動会がある」構文

—デキゴト存在文と「象は鼻が長い」構文のハイブリッド構文—

久保田一充

本発表の目的は、「息子は明日運動会がある」構文と発表者が名付ける構文を考察対象に、この構文が有する構文的・意味的特徴を解明することにある。本発表は、「ヒト NP-ハ 時間表現(-ニ) (場所表現-デ) デキゴト NP-ガ アル」の形式を持つ構文を対象の構文として定める。第 1 の目的として構文的特徴を探るが、まず、(i)ヒト NP がニ格標示できない、(ii)デキゴト NP は指示的であることを論拠に当該構文が所有文である可能性を否定する。そして、デキゴト存在文と「象は鼻が長い」構文のハイブリッド構文として記述する。第 2 の目的として意味的特徴を考察し、当該構文は「ヒト NP のスケジュール上にデキゴト NP が含意する活動が存在する」ことを提示するものであると記述する。

「が・の」交替に見られる Theme 主語と Agent 主語の非対称に関して

赤楚治之

原口智子

本発表の目的は、日本語における「が・の」交替を許す連体節内の TP 以下の構造に注目することによって、これまでの研究では扱えなかった言語事実に説明を与え、属格主語を持つ連体節に課せられる制約について論じることにある。赤楚・原口 (2010, 2011) では、属格主語を持つ関係節 (RC) には二つの制約 (I) 「Focus Particles (取り立て詞) は属格主語を持つ関係節内には現われない」と (II) 「VP 副詞は属格主語よりも左側に現われない」) が観察されるのに対し、Gapless 節の場合にはそれらが観察されないこと (cf. 海だけの見える部屋、完全にエンジンの壊れた可能性) が指摘されている。今回の発表では、Gapless 節においても、これら二つの制約が機能しているケースがあることを示し、真の対立は、RC/Gapless 節の対立ではなく、意味役割の違い (Agent/Theme の対立) であることを確認する。さらに、この Agent/Theme の対立の要因を探ることによって、先の二つの制約が RC のみならず Gapless 節をも含む連体節一般にあてはまることを論じる。

動詞の項構造とニ／ニヨッテ受身文

高井岩生

従来の研究では、主語名詞句が無生物である場合、ニ受身文は許されないが、ニヨッテ受身文は許されると言われてきた。これは、ニ受身文とニヨッテ受身文の容認性は、主語名詞句の意味特性に基づいて決定されるという考えである。これに対して本発表では、主語名詞句の意味特性だけではニ受身文とニヨッテ受身文の容認性を正しく説明することができないことを指摘し、ニ受身文とニヨッテ受身文の容認可能性を決定する主な要因は動詞の意味特性であるということをも主張する。重要なのは、その動詞の項に動作主が含まれるかどうかであ

り、主語名詞句の意味特性に、動作主・非動作主動詞という区別を加えると、ニ受身文とニヨッテ受身文の容認性が正しく説明できるのである。

授受形式がもたらす発話内効力管理領域におけるポライトネス機能

横倉真弥

本発表は、授受形式（テヤル・テクレル・テモラウ）がもたらす発話内効力について、ポライトネスの視点から解明することを目的とする。ポライトネスの要点は、実際の人間関係の距離感を言語システム上調整してコミュニケーションを選択的に行う点にある。日本語の授受形式は、発話内効力管理領域において、実際の人間関係が生ぜしめる距離を内集団関係へと質的に変換させて、距離の調整を行うことを特徴とする。日本語では実際の人間関係に一定の距離がある場合、それを明示しない形の発話内効力の調整がなされることで、距離感の中和がなされる傾向にあるが、その方法として授受形式が示す内集団関係が利用される。この授受形式が示す擬似的内集団関係は発話内効力の調整のあり方に寛容な状況を作り出すため、単独では使用しにくい文型の使用も可能にする。以上の考察をもとに、授受形式が示す人間関係がいかにして発話内効力を調整しているのかを明らかにする。

日本語の知覚動詞と認識動詞における文補語標識の交替について

佐々木淳

井上 (1976)や Kuno (1973)で考察されているように、日本語の知覚動詞構文や認識動詞構文では文補語標識である「の」、「こと」、「と」が交替する現象が見られる。本発表では、この交替が、統語構造上それぞれの文補語標識の生起する位置が異なることによるものであると提案する。まず澤田 (1993)を基に従属節の階層構造について観察する。次に従属節と助動詞の相関関係を踏まえて、助動詞にも階層構造があることを示す。さらに文補語標識と助動詞の生起分布

を観察することにより、日本語の文補語標識にも階層構造があると主張する。最後に統語構造を地図的に捉えようとする Rizzi (1997)のカートグラフィーという考え方をを用いることにより、「の」は FiniteP に、「こと」は ModalP に、「と」は CP_{force} に位置していると提案する。

完了相を標示するテイタと証拠性表現との関連性

梅野由香里

本発表では「{花子/???私}はちゃんと先生に学校休むって言っていた」のように出来事の時間的性質が同じ場合のテイタの成立に関して証拠性に基づいた情報を表す証拠性表現という概念を取り入れ分析した。テイタの基本的機能は未完了相、継続相マーカであるため完了事態を意味する場合において制限が生じ、証拠性表現として機能する場合、テイタの成立が認められることが分かった。前提として、発話者が出来事のある一部分を捉え、それを証拠とした場合、アスペクトは同時に証拠性表現として機能するという立場に立ち分析を行った。分析の結果、証拠性表現として機能する場合のテイタは常に動作継続状態や結果状態などの証拠の認識を意味するが、タは必ずしも証拠の直接的な認識を意味しないという結論に至った。このようなテイタの機能が完了事態を意味する場合のテイタの成立に関与することを主張した。

「Vナカッタ」と「Vテイナイ」の弁別基準について

－タイプ・フォーカスとトークン・フォーカスによる説明－

都築鉄平

従来[シテイナイ]と[シナカッタ]という二種類の否定表現は現在完了の否定と単純過去の否定に対応するとされてきたが、この弁別が否定の際にのみ行われる点やこの対立で説明できない[シテイナイ]が存在する点について十分論じられていない。この二つの否定形式の違いはタイプフォーカスとトークンフォーカスという二種類の指示方法の違いで説

明される。両者は事象を時間軸上の特定の時点に紐づけて指示しないかするという点において異なる。日本語では、事象を特定の時点に紐づける条件として、過去の時間領域において話者が事象を「体験」している必要がある。否定の場合、事象が「起きなかった」ことを体験ことになるが、これは、話者が当該の時間領域において事象の存在可能性を認識していることで生ずる。この「領域」と「存在可能性」の関係結びつきの強さの違いが[シテイナイ]と[シナカッタ]という否定形式に対応していることを主張する。

語頭および母音間における平音・激音・濃音の音響的特徴

—談話レベルにおける検討—

韓喜善 (ハン・ヒソン)

ソウル方言の平音・激音・濃音の弁別については、VOT、後続母音のF0、後続母音のパワーの立ち上がり、閉鎖区間長、CVフォルマント遷移などがそれらに影響を及ぼす音響的手がかりとして、生成または知覚実験を通して検討されている。しかし、先行研究では上記の特徴をすべて取り扱った研究は存在しないため、三項対立の弁別に関わる音声的特徴については未だ不明な点が残されている。本研究では、6名のソウル方言話者を対象とし、歯茎破裂音、歯茎硬口蓋破擦音および歯茎摩擦音を対象に、それぞれ語頭と母音間における平音・激音・濃音の音響分析を行った。その際、弁別に関わる要因間の相互関係を明確にするため、談話レベルにおける発話意図による違いという視点を取り入れた。

実験の結果、テスト語にフォーカスが置かれた場合は、フォーカスのない場合に比べて、全体的により長く、高く、強く発音される傾向が見られた。

韓国語、タイ語および中国語話者による日本語閉鎖子音のVOTに関する考察

清水克正

本研究は、韓国語（ソウル方言）、タイ語および中国語（北京語）の話者が外国語として日本語音声を学習する場合、その閉鎖子音のVoice Onset Time (VOT) 値にどのような影響を及ぼすのかを調査することを目的とする。これら3言語

の閉鎖子音の発声タイプは、韓国語とタイ語が3範疇、中国語が2範疇であり、有声性・無声性の2項対立をもつ日本語とは大きく異なっており、これらの話者の発音を音響分析によりVOT値を測定し、それぞれの言語の影響を考察した。音響分析の結果、これらの話者が外国語として日本語閉鎖音を発音する場合、母語(L1)と外国語(L2)との音声的な距離が関わっており、特にVOT値を中心により近似的な値でもって発音していることが明らかになった。またタイ語のように母語に有声軟口蓋閉鎖子音が存在しない場合、他の有声閉鎖音とは幾分異なった傾向を示し、日本語の有声軟口蓋音に対しては新たな範疇を設定することが明らかになった。

上海語陽入声変調における変種の出現分布：形態統語構造との関連性

高橋康德

第1音節の声調が語全体のピッチを決定する上海語変調では、第1音節が陽入声の4音節変調の場合に2種類の変種が現れる。従来の研究はこれらを自由変異と解釈したが、これを支持する客観的なデータは提示されてこなかった。本研究では、異なる形態統語構造を持つフレーズで上海語変調の上記の変種がどのように分布するのかを調査した。調査の結果、2音節+2音節の複合語「○○大学」では、4音節変調の2種類の変種だけではなく2つの2音節変調から成るパターン(2音節変調+2音節変調)が現れるが、他の形態統語構造では4音節変調の1つの変種しか現れないことが判明した。この結果は、形態統語構造の違いが上海語変調の変種の出現分布に影響を与えていることを示唆している。本研究ではさらに、なぜ他の形態統語構造では実現しない変調パターンが「○○大学」の構造で現れるのかを共時的および通時的な観点から考察する。

カドゥー語における緊喉調について

藤原敬介

カドゥー語は、ビルマ・ザガイン管区・バマウツ地方を中心にカドゥー人によって話されるチベット・ビルマ語派・ルイ語群の言語である。本発表では、筆者による一次資料にもとづいて、カドゥー語音韻論のうち声調を中心に略述した。カドゥー語の声調のあらわれを観察すると、

- (A)緊喉調は語頭ではあらわれない、
- (B)中平調の直後の低声調が変調することによって緊喉調が生じる、

という事実がわかった。さらに、緊喉調の来源である低声調そのものも、概略としては、高声調の直後にあらわれる中声調が変調することにより生じているということがわかった。そして、共時的観察からえられた結果を通時的に考察することにより、低声調は高声調的な性質をもつ接頭辞の直後にあらわれる傾向にあることをあきらかとした。

北琉球奄美湯湾方言のアクセント体系

新永悠人

小川晋史

本発表の目的は、北琉球奄美湯湾方言のアクセント体系を記述することである。湯湾方言のアクセント型は具体的には以下の3種類に分かれる。これまで奄美では3型(以上)の報告はされていない(「文節」=「名詞(+助詞)」、名詞と助詞の境界を=、ピッチの下降を]、上昇を[で示す)。

- 型：文節末から2モーラ目を含む音節の後で下降が生じる
(例：haa=ga]di「葉まで」、naa=ga]di「名まで」)
- 型：文節初頭から2モーラ目を含む音節の後で下降が生じる

(例：haa]=gadi「歯まで」、mjaa]=gadi「貝まで」)

□型：文節末のモーラだけが高くなる

(例：naa=ga[di「中まで」、mjaa=ga[di「猫まで」)

注：下降の予測位置が文節末に当たる場合は、□型と□型ともに、下降が1モーラ前にずれる。(例：ha]a「葉」(□型)、ha]a「歯」(□型))

本発表ではさらに、□型におけるピッチパターンの振る舞いから、この方言が「1音節に3モーラの長さがあることを禁止する」制約を持つことも指摘する。

ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言のアクセント: アクセントの抽出とその
弁別的特徴

三村竜之

先行研究の乏しい Sandnes 語サンネス方言のアクセントについて考察する。Sandnes 方言は、主強勢を伴う音節が語に必ず一つあり、その音節には高平調と下降調のいずれかが現れる。伝統的な(標準方言の)解釈案に倣うと二種類の「語声調」が設定されるが、音調の型は主強勢の位置に応じて決まるため、語の長さ次第で型の数は二つ以上になりうる。また、従来の解釈では Acc1 の音調型が正確に記述できず、さらにその考察範囲が一ないし二音節語に限定されているなど問題が残る。

これに対し本発表では、様々な強勢の型をもつ多音節語も広く考察し、また強勢と音調の間の従属関係から、以下の結論を導く: 1) 強弱アクセントと高低アクセントの「併存」ではなく強弱アクセントの一変種である; 2) Acc1 と Acc2 の音調型はいずれも下降調から成り立つ; 3) 主強勢を有する音節に対する相対的な下降の位置の違いが、アクセント対立においては音韻論的に本質的な特徴である。

アミ語の母音連続と挿入規則

今西一太

本稿はアミ語（南島語族）において先行研究で無関係と捉えられてきた声門閉鎖音と渡り音の関係を論じる。語根内部において、両者は共に母音連続の間において挿入される音で、以下の表のような相補分布を為す（表の左側は母音連続の一つ目の母音、上側は二つ目の母音、(?)は声門閉鎖音が挿入されるか、何も挿入されないことを表す）。一方、語根外部の母音連続では(?)となる。

	/a/	/i/	/u/	/ə/	
/a/	(?)	(?)	(?)	(?)	例 : /aa/: /maan/ [maʔan ~ maan] 「何」 (語根 /maan/)
/i/	j	(?)	j	-	/au/: /tau/ [taʔo ~ tao] 「他人」 (語根 /tau/)
/u/	w	w	(?)	-	/ia/: /kia/ [kɔija] 「恐らく」 (語根 /kia/)
/ə/	-	-	-	-	/ua/: /tsua/ [tsowa] 「いいえ」 (語根 /tsua/)

Affixes' Selections of Verbal Stems/Forms

Hiroki Koga

Assuming that lexemes may be associated with more than one stem (Bonami and Boyé 2006), a phenomenon is provided on which stem each of the morphemes of the past tense morpheme, the imperative morpheme, the voice verbal morphemes, the negation morpheme, the so-called 'non-past' tense morpheme and the conditional /(*r*)eba/ selects, the shorter or the longer, in Japanese-Yanagawa dialect. Our analysis is that the verbal stems entertain default implicative relations in the stem dependency hierarchy of the dialect. The hierarchy has the stems for the past affix at the top node, and the deeper cognitively is the function of the affix in sentences, in the lower node the stems for the affix will be placed in the hierarchy.

オノマトペ音象徴の類像性と慣習性
—韓国語擬態語の日本語母語話者による判断から—

黒沢晶子

崔絢喆

韓国語の擬態語を日本語母語話者が聞き、程度の強さを判断する実験を通して、日本語母語話者の音象徴感覚が類像性に基づくことを示す。

韓国語は、現代語に残る母音調和がオノマトペの音象徴に生かされ、母音だけが異なる擬態語のペアでは、陽母音/a/、/o/が程度の小ささと、陰母音/ɔ/、/u/が程度の大きさと結びついている。日本語母語話者は相対的に広い/a/、/o/をより「大、強、明、快」、狭い/ɔ/、/u/をより「狭、暗、醜、不快」だと判断した。韓国語と異なる基準を適用した結果、「大、強、明、快」に関しては異なるが、「狭、暗、醜、不快」に関しては(表面的に)一致したと考えられる。

広母音をより大きいものと結びつける音象徴判断は口腔内の物理的な広さに基づいており、類像的だと言えよう。それに対して韓国語の音象徴は、より狭い陰母音のほうがより大きいものを表すという点で非類像的であり、オノマトペの音象徴が慣習的に伝承されうることを示唆している。

言語流暢性検査による音声語彙生成についての検討

—英語、日本語、アラビア語、タイ語における比較言語による分析—

浅野恵子

母語話者に各言語の母語（日本語、アラビア語、タイ語）と第二言語である英語において、言語流暢性検査(Verbal Fluency Test)を用い、口頭語彙生成の語想起課題を施行した。そこで、母語と第二言語の口語語彙生成に異なる特徴性があるかを語彙生成数と想起課題別成績パターンの面から分析を行なった。さらに質的な語彙の種類の違いも検討した。多くの先行研究では、どの言語においても母語はカテゴリー一流暢性検査課題生成数が多いとされている。しかし今回の研究の結果、第二言語においては、どのグループにおいても、音韻流暢性検査課題で多く生成されたという顕著な逆転的特徴がみられた。この2つの流暢

性検査課題は異なった脳内言語処理メカニズムによって遂行され、さらに第二言語話者は母語話者が生成する際と異なるタスクを用いている可能性が示唆される。また質的な語彙生成において、習熟度が高い学習者は母語話者が生成した語彙に近似の語彙を生成していた。

SO 語順選好は普遍的か？—カクチケル・マヤ語の聴解実験による検証

小泉政利

金情浩

木山幸子

八杉佳穂

Lolmay Pedro García Matzar

Juan Esteban Ajsivinac Sián

日本語など多くの言語において、主語（S）が目的語（O）に先行する語順のほうが、主語が目的語に後続する語順よりも文理解の際の処理負荷が低いことが知られている（SO 語順選好）。しかし、従来の文処理研究は全て SO 語順を基本語順にもつ「SO 型言語」を対象にしているため、SO 語順選好が個別言語の基本語順を反映したものなのか、あるいは人間のより普遍的な認知特性を反映したものなのかが分からない。そこで、OS 語順を基本語順にもつ「OS 型言語」の一つであるカクチケル語（グアテマラで話されているマヤ諸語の一つ）を対象に文聴解実験を行った。その結果、カクチケル語では、統語的基本語順である VOS 語順が VSO 語順や SVO 語順よりも文聴解時の処理負荷が低いことが示された。このことから、SO 語順選好は普遍的なものではなく、個別言語の文法が文理解時の処理負荷に大きな影響を与えることが分かった。

日本語ガーデンパス文における処理負荷と初分析理解保持の関係性

中村智栄

新井学

本研究では「医師が白衣を持っている高校生をあわてて追いかけた」のよう

な日本語ガーデンパス文を用い、(1) 関係節における名詞句の意味的整合性、及び、(2) 関係節の長さが文処理における初分析と再分析の過程にどう影響を与えるかを検証した。自己ペースリーディング法を用いた実験と眼球運動計測実験の結果から、関係節内の名詞が主語（「医師」）と意味的整合性が高い条件のほうが、関係節種部（「高校生」）と整合性が高い条件に比べ再分析における処理負荷が高いことが示された。さらに、関係節が長い文では、構造的曖昧性を解消する情報が遅く現れるため初分析理解を保持する時間が長く、再分析にかかる負荷が増大した。これにより、関係節が長く、かつ名詞が主節の解釈を支持する条件の文で最も処理負荷が高くなり、そのため初分析理解が正しく棄却されにくくなったことが実証された。

複合名詞と複合述語文：日本語を母語とする幼児の縦断的観察研究

中谷友美

Snyder (1995, 2001)は、(1a)の複合名詞と(1b)の複合述語文の産出には強い相関性があり、生産的な複合名詞の形態的使用可能性は、複合述語文の統語的使用可能性の絶対条件であるとする複合語形成パラメターを提案している。

- (1) a. banana box b.
b. John hammered the metal flat. (Snyder 1995)

日本語の獲得研究では、Miyoshi (1999)がコーパス分析により、また Sugisaki and Isobe (2001)が横断的実験により、それぞれ複合語形成パラメターの存在を支持している。本研究では、日本語を母語とする幼児の縦断的観察(0;1-4;0)を基に、Miyoshi (1999)の報告と同様、(2)に示すように、複合名詞が複合述語文より早くあらわれることを示し、複合語形成パラメターを支持する。

- (2) a. ふいりぴんぶーぶ [フィリピンを走っているバス] (1;11)
b. ゆうたが、ゆうたがはんぶんいきちやっていい？
(粘土遊びをしながら) (2;2)

さらに、幼児の産出する複合名詞を分析し、主要部パラメターの値の設定が、言語獲得のかなり初期に行われるとする Very Early Parameter Setting (Wexler 1998)の提案を日本語から支持する。

多重指定部パラメーターと Φ 素性構成：SLA の観点から

石野尚

多重主格構文(MNC)／多重属格構文(MGC)の容認性には言語間の差異が存在し、日本語は両構文共に容認する。T がその指定部の主格を、D がその指定部の属格を認可するという標準的統語理論の仮定に基づけば、日本語の MNC/MGC は T 及び D が多重指定部を認可する能力を有すること(Ura 1994,1996)を示し、その能力は主要部の Φ 素性の欠損(ϕ -defective)に起因する。他方、英語は両構文を容認せず、T/D は ϕ -defective ではない。本発表は、多重指定部に関する日英のパラメーター差を SLA の観点から分析し、以下を提示する：(I)経験的には、日本語母語英語学習者は英語の MNC を容認しないが MGC は容認するという観察結果を報告する。(II)理論的には、母語の語彙が内包する各 Φ 素性指定の転移と、対象語彙の素性指定の移入とが有標性条件に従う形で生じ、習得途上の語彙の Φ 素性は合成的に形成されると主張する Feature Transfer/Feature Learning (FTFL)仮説を提案し、上述の観察結果に加えて英語母語日本語学習者の習得過程も FTFL で適切に説明できることを論証する。

格標識付き stripping 構文における照応の理解過程

—事象関連電位を用いた研究—

伊藤益代

備瀬優

矢野雅貴

坂本勉

Hankamer & Sag (1976)によって表層照応と深層照応の区別が主張され、日本語においても照応が関わる構文について議論されてきた。本研究では、日本語において表層照応のひとつであると考えられる格標識付き stripping 構文 (CM-stripping 構文、Fukaya & Hoji 1999 他)を用いて、照応という理論的構築物の妥当性を心理的実在性の点から検討した。具体的には、事象関連電位(ERP)を指

標として、CM-stripping 逸脱文がどのような要因（統語的、意味的な性質）に依拠するものであるのかを分析した。実験の結果、CM-stripping 逸脱文の処理に際して、統語的逸脱を反映すると考えられている P600 成分が惹起された。このことは、日本語母語話者が CM-stripping 構文の理解時に照応の解釈を行っていることを示す心理言語学的証拠であり、さらに、その過程において統語的処理が関わることを示唆する。

fMRIを使用した日本語の「自分」を含む文の処理に関わる脳活動報告

上田 由紀子

中村 和浩

橋本 洋輔

内堀 朝子

豊嶋 英仁

木下 俊文

機能的磁気共鳴画像（fMRI）を使用し、日本語の「自分」を含む文処理に関わる脳活動を測定、実験結果を報告する。1）「自分」を含む正文から「自分」を含まない正文の差分では、わずかな左下前頭回 弁蓋部の賦活と多数の脳基底核の賦活を観察。2）「自分」を含む正非文から「自分」を含まない正非文の差分では、左背外側上前頭回に強い賦活を、右補足運動野、右縁上回にもわずかな賦活を観察。上記1）関し、いわゆる文法野の左下前頭回 弁蓋部の賦活がわずかであったのは、ここで先行詞決定に関わる統語操作が、文構築の最も基本的な自動的処理の一つであるからとする可能性がある。上記1）-2）における「（背外側）上前頭回」や「脳基底核」における強い賦活に関し、「上前頭回における自己認識」との観点から検討する。

他動性の観点から見た現代韓国語の「漢字語 + ha-da/doi-da」動詞について

高地朋成

本研究は韓国語動詞の他動性測定基準に関する先行研究を批判的に検討し、「漢字語 + ha-da/doi-da」という構成を持つ動詞の他動性数値化を試みた。その結果、分析対象の動詞は大きく 3 つのクラスに分類でき、参加項の数および目的語の被影響性という観点を加えた分析により、さらに複数のクラスに細分類できることが明らかになった。他動性分析は、格フレームを利用した分析と互いに補い合うことで、より詳細に動詞の特徴を記述することが出来るという点で有用である。というのも、格フレームの観点では同じクラスに属する複数の動詞が他動性の観点では別のクラスに分類され、また他動性の観点からは同一のクラスに分類される動詞同士でも格フレームの観点からは別のクラスに分類される場合があるためである。今後は両方の観点から動詞について詳細に記述し、各動詞間の類似性と差異性の追究を行うことが必要となるであろう。

韓国語の「-n kes-ita」文の当為性に関する一考察

— 「-n pep-ita」との比較を含め—

李英蘭

本発表は、韓国語の文末に現れる -n kes-ita 文の用法のうち、当為の意味を表すものを対象とし、韓国語において当為を表す別の表現である -n pep-ita との相違点を探ることを目的とする。両形式は、「XはYする kes-ita/pep-ita」という形で、当該事態が「本来、そうである」と述べる際、用いられることで類似している。が、-n kes-ita は「NP1はNP2だ」という構造をもち、Xに対する本質や傾向を表すのに対し、-n pep-ita は「XはYする」という事態全体が一般的な pep(おきて・道理)であることを表している。また、「そうすべきだ」という当為判断を表す場合も、-n pep-ita は社会一般的に受け入れられる規範に限定される傾向

があるのに対し、-n kes-ita はより個別的な忠告や助言の場面でも用いられる。このような違いは、-n kes-ita はものを指していた本来の意味から「当為」という新たな用法へと発達してきたのに対し、-n pep-ita はまだ「おきて・道理」という pep の語彙的意味に拘束されていることに起因していると考えられる。

韓国語と日本語東北方言の非動的述語の時間表現

高田祥司

非動的述語の〈過去〉には、「{[1]昔/[2]先日会ったが}、彼は髪が長かった」のように、[1]事態成立時 (ET) / [2]認識時 (PT) に注目したことがあるが、韓国語と日本語東北方言では、両者を表す kil-ess-ta / 「ナゲカッタ」の他に、後者を明示する kil-te-la / 「ナゲカッケ」(遠野方言) を用いる。-te-が PT の具体性を必要とするのに対し、「ケ」は、ET が過去であってはならない(山形方言では過去でも可)が、PT の具体性は問わず(よって、ET のない否定の場合は汎用)、「事態の直接認識」を表す機能が強い。

両言語には、五感による「認識」のみを表す-te- / 「ケ」に加え、一人称主体の事態の「体験」も表す-essess- / 「~タッタ」があるが、-essess-はこのような意味が弱く、ET を過去時に限定する「現在との断絶性」が強い。

以上から、韓国語では、-te-が PT、-essess-が ET の具体性を持つが、東北方言では、「ケ」「~タッタ」がそれらの具体性を失い、体験・認識の意味を伸張させていると言える。

比較相関構文におけるホドの構造と解釈

東寺祐亮

比較相関構文「P ほど Q」は、通常、P と Q の度合いが比例するという解釈を持つが、P の主要部以外の要素の度合いが比較の対象になることもある。従来の研究では、石居(2008)のように、P のホドが統率する範囲から「度合いを持つ要

素」を選択することによって、Q との比例関係を作るという分析が考えられてきた。しかし、本発表では、統語的に「度合いを持つ要素」が選択されるとする分析では、説明できない現象が多々あることを示す。そして、統語的に「度合いを測られる対象」が選択され、その度合いとなる観点が語用論的に決定されると考えると、それらの現象も含めて、この構文がうまく説明できるということを示す。

日本語文産出過程における動詞決定の時期：
健常者の自発話に見られる助詞の言い誤りをもとにして

井原浩子

オンラインの文産出過程の説明では、動詞は発話が始まる時点で選択されていることを前提とする場合が多く、動詞が決定される前に主語が発話される可能性のある Levelt(1989)の統語構造構築方法について Ferreira(2000)は問題点として指摘している。本発表では、健常者の自発話に見られる助詞の言い誤りのうち□産出された自動詞(非対格)の主語に相当する名詞に「が」ではなく「を」が付与されている、□目的語に「に」格を取る他動詞で「に」の代わりに「を」が付与されている、または「に」格を必須として取る自動詞で「に」の代わりに「を」が付与されている、を取り上げ、動詞が文の最後に置かれる日本語では発話が始まる時点で動詞は決定されていない可能性もあることを示す。その上で、理解の場合に、動詞が文末に現れるのを待つのではなく入力済みの名詞句の情報を手掛かりに文構造を予測しながら処理を進める(村岡 2006)のように、産出の場合もメッセージレベルの概念に基づき暫定的な構造を予測し、それに基づき格を付与することで、個別の動詞が持つ語彙概念構造を検索することなく格が付与されるという仮説を提案する。

Shifty Operators in Dhaasanac

Sumiyo Nishiguchi

Dhaasanac is a Cushitic language spoken by 55,000 speakers in Ethiopia and Kenya. The data used in the present study is based on my field work conducted in 2011. Since Kaplan (1977) claimed that indexicals such as *I*, *you*, and *yesterday* are rigidly specified, there has been a debate on whether the context can be really shifted or not. Schlenker (2003), Anand and Nevins (2004), and others, have argued that context shifters, called *monsters*, do exist in languages such as Amharic and Zazaki. This paper presents new data that contradicts the Kaplanian view. The reference of the indexical *I* in the embedded clause appears to be shifted by the monstrous attitude predicates *say* or *tell* in Dhaasanac.

中国語複合動詞の分類再考-語彙的アスペクトの観点から-

青柳宏

張楠

本稿は中国語の複合動詞が持つ語彙的アスペクトを Tai(1984)、申(2009)、楊(2008)などの先行研究を踏まえて再検討し、(□)中国語の複合動詞には「活動(activity)」「到達(achievement)」「達成(accomplishment)」の三種類の語彙的アスペクトを持つものが存在し、(□)アスペクト素性は後項述語によって決定される、ことを主張する。また、複合動詞は語彙的アスペクトによって、活動または達成を表す「校正(校正する)」タイプと到達を表す「杀死(殺し死ぬ)」タイプの二種類に分けられることをみる。この分類は木村(2007)の結合度による複合動詞分類とほぼ一致する。ただし、木村はこの分類を形態的結合度と生産性に基づいて行っているため、「杀死」と「写完(書き終える)」は別のカテゴリーに属するとしているが、語彙的アスペクトの観点からはいずれも到達事象を表すと考えられる。

後置量化子の意味解釈

田中拓郎

本論は、日本語の、名詞に後置される量化子の分布とその意味解釈について論じる。後置量化子は属格「の」がある場合とない場合で、容認度が異なる場合がある。また「の」を伴う後置量化子は、文脈により個体の総数量が特定され、その中での当該の個体数の割合を示す。

- (1) ジョンは課題図書{のすべて/すべて}を読んだ
- (2) ジョンは課題図書{のいくつか/*いくつか}を読んだ
- (3) ジョンは課題図書{*の3冊/3冊}を読んだ
- (4) ジョンは課題図書{*のたくさん/*たくさん}を読んだ

本論では、(1)-(4)のように後置量化子の容認度が異なるのはなぜか、属格「の」を伴う後置量化子がなぜ部分的解釈をとるのか、の2点について考察する。量化子は量化の対象により基底生成される位置が異なり、属格「の」は「個体の全体量と量化対象の割合が文脈によって確定可能でなければならない」という前提を導入する、と提案する。

《ポスター発表 Poster presentations》

日本人とトルコ人大学生の個別外来語に対する受容意識について

TOKSOZ, Levent

本研究では、日本人及びトルコ人の大学生を対象に、個別外来語の受容意識、即ち、その語を母語に受け入る際に感じられる好ましさが、話者の外来語一般に対する受容意識の高低、または、その個別外来語の使用率によってどう異なるかを探った。その結果、受容意識の高低に関わらず、日本人大学生は使用率の「高い」外来語と「極めて高い」外来語に対しては、一貫して肯定的である。また、外来語一般に対して受容意識の低い大学生の方が、外来語の使用率に関して、より敏感に反応している。一方、トルコ人大学生は、受容意識の高低に関わらず、使用率が「極

めて低い」外来語については、否定的である。また、外来語一般に対して受容意識の低い大学生にとっては、使用率の「極めて低い」外来語と「低い」外来語との好ましさの評価が同じであり、受容意識の高い大学生にとっては、使用率の「極めて高い」外来語と「高い」外来語との好ましさの評価が同じである。

アイヌ語における受動文の主観性

FREGUJA fulvio

アイヌ語沙流方言では、受動文と不定人称文は動詞に付加する「a-」の接頭辞で形成される。周知のように、不定人称文と受動文の間に数多くの意味的な類似点がある。アイヌ語の受動文に関する従来研究では、話し手は動詞が述べる事態から分離する存在として捉えられてきた。しかし、言語は深く主観性に根ざすものであり、特に話し手の視点の移動は受動文を特徴づける重要な現象である。ここでは事態の関与者間有生性の度合いを表現の主観性の現れと見る事ができる。本稿では、不定人称文と受動文の従来との区別を新たな観点から眺めたい。具体的には、受動文の一つの機能が動作主の非焦点化であるという事を考慮すれば、他動詞の不定人称文を受動文の一種と考えられる。その意味で、主観性の観点から、受動文の新たな分類を提唱したい。結論として、主観性の増減に基づいて、従来との不定人称文に対応する客観的な受動文と主観的な受動文という区別が認められる。

Reflexivity:

semantic extension of English spatial particles and Japanese motion verbs

Ashlyn Moehle

This study presents the results from a comparison of the polysemous network of English *out* with Japanese *deru/dasu*, demonstrating that the reflexive trajectory encoded by *out* cannot be encoded by *deru/dasu*. Comparisons of other pairs of English spatial particles and their Japanese motion verb counterparts reveal similar results, and I suggest that this is due to the nature of how spatial particles versus verbs profile

relations between entities, namely by apprehending the relation via either summary or sequential scanning. I argue that the reflexive trajectory as a route of semantic extension crucially relies on the ability to simultaneously access two salient, temporally-situated configurations of the same entity, resulting in a gestalt-like static spatial conceptualization. This is only possible in English, where path is expressed as an atemporal relation and apprehended via summary scanning.

非項要素の後置：機能と構造

綿貫啓子

本稿では、従来十分に論じられてこなかった「非項要素」（副詞・接続詞）の後置について、その機能と構造を対話データを基に分析・記述する。

まず、「副詞」は命題内副詞と命題外副詞に二分できるが、「命題」（叙述内容）の一部を形成し、修飾限定する「命題内」副詞が後置されると、「命題外」副詞と同様の機能、すなわち、命題全体に対する「話し手」の心的態度・判断の解釈が出てくる。また、「命題内」副詞には、その意味機能により、後置されにくい場合がある。次に、「接続詞」は、後置されると、命題とそれに先行する情報との論理構造が文末で明示され、同時に、「話し手」の心的態度・判断が表出される。以上の事実から、後置される「非項要素」は、命題（叙述内容）全体に対する「話し手」の心的態度や判断を表現する機能を有すると結論づけ、さらに、非項要素の後置は移動ではなく、「付加」操作によって生成されること主張し、その構造を提案する。

統語構造が認知傾向に及ぼす影響について—眼球運動測定による検証—

田島弥生

石崎俊

福田亮子

西洋人は事物を一つの独立した存在とみなすが、東洋人は事物を全体の一部として把握するため、その分、周辺情報により注目する認知傾向を持つと主張している一連の研究に対し (Masuda & Nisbett 2001, Chua, Boland & Nisbett 2005, Boland, Chua & Nisbett 2008, etc.)、この認知傾向には彼らの主張する社会文化的要因 (東洋的思想) 以外に何らかの言語的要因が関与しているのではないかという仮説のもと、日本語、中国語、韓国語の各母語話者を対象に、注視点追跡装置 Tobii アイトラッカーを用いて、静止画像を言語描写する際の眼球運動を測定した。その結果、韓国語母語話者に中心物に先に注目する傾向が ($p < .01$ Tukey HSD)、一方、日本語母語話者に周辺情報に先に注目する傾向が観察された ($p < .05$)。本発表では、このデータを基に、周辺情報に対する認知傾向に及ぼす言語的要因について、統語・談話構造の観点から考察する。

動詞性名詞と機能動詞『する』の共起について

佐藤佑

本発表では、「勉強 (□勉強する)」「動き (□動く)」のように動詞との対応関係有する名詞 = 「動詞性名詞」が機能動詞「する」と共起する諸例 (「英語の勉強をする」「妙な動きをする」) について検討する。影山 (1993) で「動名詞」からは排除された「胃ガンの手術」「遠足の準備」といった名詞句が、むしろ名詞が動詞の領域に踏み込んだ好例として一考に値する (→後述のパターン(4)) ということも含め、動詞性名詞と「する」の組み合わせ (「VN をする」構文) が、なぜ、どのような動機によって用いられるかを分析する。

「VN をする」構文の使用動機は、重複する部分もあるが、概略、(1)前もって総体を意識して取り組む行為の実現 (2)行為・作用の様態の切り出し (3)一般論

としての行為の想定 (4)動詞句に表すことのできない事物の取り込み (5)その他 (作者の書き癖など) の 5 パターンに区別される。

《ワークショップ 1 Workshop 1》

多言語使用—グアテマラの挑戦

企画者・司会者：小泉政利

2007 年 6 月に国連総会において「言語と文化の多様性を維持・促進するために多言語使用を進める」という趣旨の決議が採択された。その実現は容易ではないが、20 を超える民族言語が話されているグアテマラでは政府の方針として国をあげて「言語と文化の多様性の維持・促進のための多言語使用」に取り組んでいる。本ワークショップでは、日本における中米言語研究の第一人者である八杉佳穂氏とグアテマラの研究者 2 名（グアテマラの民族言語の一つであるカクチケル・マヤ語の母語話者）にグアテマラにおける取り組みを 3 つの異なる観点から紹介してもらった後、多言語使用をめぐる諸問題について議論した。

グアテマラの多言語政策とカクチケル語におけるその具体的取り組み

八杉佳穂

マヤ諸語のひとつカクチケル語は、グアテマラの首都のすぐ西の高地一帯で話されている。グアテマラではメジャーな言語であるが、長い間のスペイン語の影響下、話者数が減少し、現在 40 万ほどの話者しかいない。ところが 1980 年代から始まったマヤ文化復興の流れの中で、グアテマラで話されているインディヘナ諸言語の書記法が 1987 年に定められ、マヤ言語アカデミーやオクマ言語研究所、フランシスコ・マロキン言語研究所などを基盤として、カクチケルの人々は、文化復興の中心的役割を果たしている。カクチケル語は VOS 型言語であるが、実際には SVO 型がより多く現れる。それにより、行為者焦点化構文の衰退、焦点化や強調のための不変化詞の多用、その不変化詞の関係代名詞化などが起こってきた。方言の違いを超えて、標準語化のための正書法が制定され、標準語文法が書かれ、学校教育にも用いられ始めた。その過程は危機言語にとって大変参考になるものである。

標準語化への道：カクチケル語の場合

Lolmay Pedro García Matzar

スペインによる征服以後、スペイン語が押しつけられたことにより、マヤ諸語は使用の場をなくし、言語も消えていった。ここ数年の間に、カクチケル語やキチェ語、ケクチ語、マム語のような、話者 40 万人以上を有す“大言語”でも、話者は大きく減少しているが、マヤ文化復興運動や武装衝突や平和調印などによってマヤとしてのアイデンティティは強くなり、今日では自分たちの文化や言語使用に対して意識をもつ人が増えている。本発表では、カクチケル語の標準化の過程を、正書法・形態論・語彙論・統語論についてそれぞれの具体例と、それに伴って起こったさまざまな問題点を紹介した。また、二言語教育局 DIGEBI (Dirección General de Educación Bilingüe Intercultural) と協働して国家教育システムに導入された教授法と、それに対する教師たちの抵抗についても紹介した。

カクチケル語の完了相

Juan Esteban Ajsivinac Sián

本発表では、カクチケル語の動詞が完了相をとるときの特徴と完了相が許容される使用規範、文法情報について明らかにすることを試みた。完了相は *-un, -on* の接尾辞を用いて表される (例: *ekichapon* 「彼らはそれらを掴んだ～掴んでいる」; *ekichupun* 「彼らはそれらを消した～消している」)。完了相は接尾辞でマークするが、完全相や不完全相、可能相は接頭辞でマークする。能動動詞は、完全相、不完全相、可能相において、同じような方法で受動態や逆受動態へ変換される。一方、能動動詞の完了相の態の変換はそれらとは異なったプロセスで行われる。態の変化が起こる時、これらの接尾辞は逆受動態や受動態を表すのではなく完了相を表す。文法情報を付加したり、態を変化させるにはある種の制約があるが、完了相の形態と使用法を理解するにはこれらの制約を分析することが必要である。

《ワークショップ 2 Workshop 2》

Noun phrases in Japanese: Syntactic dependencies and interpretations

Organizer and Chair: Masao OCHI

The main goal of this workshop is to elucidate the syntactic and semantic nature of

various nominal expressions in Japanese (and other languages) by analyzing syntactic dependencies that are intimately connected to the interpretation of the nominal expressions involved. We report results of our investigations conducted at three distinct syntactic levels: at the noun phrase level (NP/DP), at the predicate phrase level (vP or Aspect Phrase), and at the clausal level (CP and possibly beyond), which incidentally correspond to the three syntactic domains identified as phase domains in the recent minimalist literature.

Classifiers and plural/collective elements in the nominal domain

Masao OCHI

This presentation investigates nominal architecture in Japanese (and Chinese). In order to deal with such theoretical issues as the presence/absence of the functional layers in the nominal domain in the classifier languages (Chierchia 1998, Cheng and Sybesma 1999, Bošković 2008), I will examine several syntactic and semantic properties of plural/collective expressions such as *-men* in Chinese (Iljic 1994, Li 1999) and *-tachi* in Japanese (Kurafuji 2004, Nakanishi and Tomioka 2004) as well as those of adnominal numeral classifiers. Based on Li (1999) and Watanabe (2006), I will explore a unified analysis of *-men* and *-tachi*, encompassing some differences between the two, including their (in)compatibility with the classifier (e.g., **san-ge xuesheng-men* vs. *san-nin-no gakusei-tachi/gakusei-tachi san-nin*).

On the internal-structure of the accusative WH-adjunct *Nani-o* and its implication for Adjunct Condition effects: A preliminary study

Yoichi MIYAMOTO

This paper examines the behavior of the WH-adjunct *nani-o* (Kurafuji 1997, Ochi 1999, among others), and seeks an implication for adjunct condition effects. Following Iida (2011), the paper proposes that *nani-o* contains a covert WH-operator (WH-Op)

(Watanabe 1992), the movement of which enables us to explain why this WH-adjunct is subject to more restrictions than *naze*. Crucially, this proposal assumes that the WH-Op can be extracted out of the WH-adjunct in question. Based on Miyamoto (to appear), the paper suggests that *nani-o* can enter into an Agree relationship with ASP(ect) and this Agree relation permits the Op-movement in point. Accordingly, the paper supports the claim that adjuncts are not inherent barriers (Demonte 1988, Rackowski and Richards 2005, among others).

“Arbitrary” zero pronouns revisited

Satoshi OKU

This presentation discusses the properties of so-called “arbitrary” pronouns, such as *Mizu-ga nakere-ba pro ikite ikenai* ‘(pro) cannot live without water,’ *Eki-dewa pro shinbun-o utteiru* ‘(pro) sells newspapers at the station,’ or *It is fun PRO to play baseball*. It has been assumed that non-controlled PRO_{arb} is a “default” case (Hasegawa 2010) or “elsewhere cases” (Boeckx, Hornstein, and Nunes 2010), which means that its syntactic/semantic properties are not well-constrained. This is not a desirable situation in terms of language acquisition (Roeper 1987). I will argue that at least some cases of “arbitrary pros” can be analyzed as a variable bound by a quantifier, and will explore a possibility that some Japanese cases involve “pragmatic control” by a Topic phrase.

《ワークショップ 3 Workshop 1》

使役構文の意味とその拡張—責任の言語学に向けて—

企画者： 長谷川明香

司会者： 西村義樹

コメンテーター： 鷲尾龍一

使役構文は、典型的には、人 (X) が意図的かつ自発的に自分の身体を動かして人・もの (Y) に対して直接働きかけ、その結果、Y が X の意図通りの変化を被る事象を表す。しかし、そうでない場合にも同じ文法形式が用いられる場合が少なくない。受身形式が予想される状況においても使役形式が使われる場合がある (cf. Washio 1993)。本ワークショップでは、使役形式の文法的・意味的特徴を、「責任」との関係で考察する。日本語・タガログ語・シベ語の特定の使役形式を取り上げ、その使用範囲および意味的共通性を議論する中で、「責任」という概念 (Ikegami 1982, Nishimura 1993) が、使役構文の分析にとって有用であることを論じる。使役を表す各構文で被使役者 Y の変化に対するコントロール可能性を使役者 X が持っていること、それ故、その変化を生じさせた責任が X にあるという捉え方が採用されていることを主張する。

日本語の非典型的な語彙的使役構文

長谷川明香

第1発表は、(1)に代表される日本語の語彙的使役構文の典型的な用法と、(2)(3)などの非典型的な用法との関係を、責任・コントロール可能性・許容使役の観点から論じる。

(1) 一郎は (暑かったので) 窓を開けた。

(2) 主語が、実際の動作主ではなく命令・依頼している人物である場合：

a. 聖徳太子が法隆寺を建てた。 b. 花子は先週髪を切った。

(3) 動詞句が含意する変化が主語の働きかけなしに生じているように思われる場合：

恵子は今年の震災で学校を焼いてしまった。

(2)については主語が行為者や目的語に対して持つコントロール可能性、および、社会的慣習から行為者が背景化されて、(3)については主語が目的語に対して持つコントロール可能性から許容使役の解釈がなされて、動詞句が含意する変化に対する究極的な責任が主語に生じることになる。この解釈が適用されることが、使役構文の使用の動機付けとなっている。

タガログ語の pa- 使役構文と責任

長屋尚典

タガログ語の使役構文には非行為者焦点構文による語彙的使役と使役接辞 pa- による形態論的使役が存在し、それぞれ操作使役と指示使役に対応するよう見える。しかし本発表が明らかにするように、pa-使役構文が行為者焦点で用いられたときには、指示使役だけでなく、再帰使役や介在性、受身的状況、専門的技術の享受、自分自身の状態変化など、指示とも直接的働きかけとも言いがたい用法が存在する。本発表ではこの pa-使役構文の多義性を理解するには責任の概念が必要であると主張する。すなわち、pa-使役構文が指示使役を表す場合でもそうではない場合でも、使役者あるいは使役者のように言語化された要素が文全体で表現された事態に対してコントロール可能性を有しており、当該事態の責任者であるという捉え方が採用されている。この分析をとることで pa-の意味の諸相は統一的に理解できるようになる。

シベ語の動詞接尾辞-we の多機能性と責任

児倉徳和

シベ語のヴォイス接尾辞-we は使役と受身を表す。両者の区別は-we が現れる構文の違いにより、使役を表す文は「主格名詞句（使役者）＋対格名詞句（被使役者）」という項構造を、受身を表す文は「主格名詞句（被動作主）＋与格名詞句（動作主）」という項構造をとるが、-we はその他の構文にも現れ、また構文自体では使役か受身か区別できない場合も存在する。本発表では-we の現れる構文の意味機能を、「文の表す事態が生起した責任を何らかの形で主語に帰すること」として捉えなおし、さらにツングース諸語のヴォイスについて「主語の『関与』を表す」とした風間（2002）や、同系のエウエン語のヴォイス接尾辞-v について「被害構文」であるとした Malchukov(1993)などの論考を踏まえ、「責任」と「被害」を互いに対立する「関与」のあり方として捉えることが、使役と受身の関係を捉えるのに有効であることを示す。

《ワークショップ 4 Workshop 4》

等位構造研究の新視点

企画者：依田悠介

司会者：松原史典

Ross (1967)の等位構造制約 (Coordinate Structure Constraint) 以来、等位構造は言語学 (特に、統語論) において欠くことのできない論点の一つとなったが、等位構造がどのような派生によって生成されているかは研究者によっても意見が分かれており、等位構造制約が何であるかについても今のところ統一した見解はない。本ワークショップは、等位構造に関するこれまでの研究成果を鑑み、「等位構造が何であるのか」という根本的な問いから出発して、それが統語的にどのように派生されるかという問題を今一度、生成文法の観点から考え直すことによって、これからの等位構造研究の発展に向けた新たな分析的視点を提供する。さらに、等位構造というものが言語学的に何を示唆し、何を示唆しないかについての一つの解釈モデルを提示し、等位構造が担う言語学的意義について改めて検討する。

等位構造を導く等位接続詞の発達と文法化

依田悠介

本発表では、節と節をつなぐ等位接続詞および等位構造の特徴をまとめて議論する。具体的には、日本語の等位接続詞は、代用表現の「そう」＋軽動詞のテ形「して」から成る「そうして」(複雑形) から文法化によって派生した「そして」(単純形) のみであることを指摘し、この単純形の等位接続詞に導かれる等位構造のみが、いわゆる等位構造制約の適用を受け得る真の等位構造であることを主張する。さらに、この等位接続詞は、その中核的な意味として「同時性」という共通の特徴を有しており、等位構造が意味的な観点からも定義でき

ることを示す。本発表の見解は、京極・松井 (1973)による通時的研究から導き出されたデータや西欧諸言語の接続詞の文法化のプロセスとも響き合うものであり、等位構造制約に従う統語構造のみがいわゆる等位構造と認定できるとの主張は汎言語的にも補強される。

移動分析による二重目的語構文の派生と等位構造制約

玉木晋太

本発表では、「太郎が[花子にリンゴ 2 個と次郎にバナナ 3 本]をあげた」のような二重目的語構文内に見られる等位構造に注目し、この構造の派生過程を極小主義統語論の立場から明らかにする。間接目的語と直接目的語から成る[]の部分は、VP が等位接続された構造から動詞が Across-the-Board 移動した結果であると考えられていたが、実際は通常の DP と同様の統語操作を受けることが可能であることから、VP ではなく DP が等位接続されていると考えられる。本発表では、この構造が oblique-movement、sideward movement、Parallelism Requirement、PF 削除の操作によって説明されることを主張する。また、本発表による等位構造の統語的派生プロセスを認めれば、等位構造制約はもはや独立した構造的制約ではなく、一般的な「移動」と「削除」の操作に還元されることが示される。

等位構造内での構文交替 —データとその理論的示唆—

工藤和也

本発表では、英語において“The teacher gave [me a book by Chomsky] and [a book by Hornstein to the other students].”のように、等位構造内でいわゆる構文交替が可能であるというデータを提示し、これが人間のメンタル・レキシコンのデザインと深い関わりを持っているということを議論する。このような文は解釈上 2

つの行為が同時に行われたという「同時性」の解釈を許すため、同一の事象項の下に2つの出来事が起こったと解釈でき、このような環境下での構文交替は、単一の語彙項目からの選択的な写像によって意味と統語を結びつける生成語彙意味論のアプローチによって最も自然に説明される。さらに、そう考えることによって、生成文法の研究でこれまで無視されてきた語彙習得や構文交替の言語間変種の問題にも、一様の解決案が示せることを主張する。

日本語と中国語の類別詞に関する認知言語学的考察

企画・司会：陳奕廷

コメンテータ：西光義弘

近年、類別詞に関する研究は様々な分野から論じられてきた。特に認知言語学においては、人間の認知能力の一つであるカテゴリー化が類別詞の意味に反映されるという観点から、多くの研究が行われている(Lakoff 1987, Tai 1990, 松本 1991, 西光・水口 2004など)。本ワークショップでは、数詞に付加される形態素としての「数量類別詞(numeral classifier)」を持つ日本語と中国語を取り上げ、カテゴリー化などの多様な認知能力の土台の上に類別詞の使用用法が成り立っていることを明らかにする。その中で、日本語と中国語の差異にも注目する。Saalbach & Imai (2005)は同じ類別詞を持つ言語であっても、類別詞の使用頻度が高い中国語では認知実験の際に類別詞の影響が見られるのに対し、使用頻度が低い日本語ではその影響が見られないと指摘する。本ワークショップは両言語の数量類別詞にほかにどのような差異が存在するのかをいくつかの比較研究によって示す。

近年における日本語類別詞の意味構造と体系の変化

吉田康代

松本曜

ここ四半世紀における日本語類別詞の意味構造と体系の変化を、2つの容認度

調査から分析する。一つは、異なる世代における 54 の物体・事物に対する「個」の容認度調査（2010 年）、もう一つは、24 年の間を置いた、55 の物体に対する 17 の類別詞の容認度調査(1987 年及び 2011 年)である。その結果から、1)「個」は、その使用領域を抽象的事物に拡大しつつあり、それは、一部の必要条件が典型条件となり、また典型条件が弱い条件になったことによる。2)指示物世界の変化により、「本」の非典型的用例に変化が見られる。3)「丁」の使用が非典型的用例から廃れ始めている。4)「つ」がデフォルト的立場を失いつつある、の 4 点を示す。さらにそれを認知意味論的立場から考察し、1)意味変化はプロトタイプ構造の周辺から起こること、2)一般化（意味の拡大）の過程は類似性に基づくカテゴリーメンバーの拡大によることを主張する。

日中両言語の類別詞の使用における全体性の影響

游韋倫

夏海燕

個別性を持つ具体物（以下で物）の「全体性(wholeness)」は、中国語の「个」「块」と日本語の「個」「つ」の使用に影響を及ぼす。全体性とは、物が本来の形状を持つという性質である。この基準で、物が□全体性を持つ物（[+wholeness]：リンゴ）、□全体性が人工的に与えられる物（[(+)wholeness]：ケーキ）、□全体と部分の区別がない物（[0wholeness]：石）、□非全体性を持つ物（[-wholeness]：リンゴの一部）に分けられる。中国語では、「个」は□、□に使われ、「块」では□、□、□に使われる。調査結果によると、「个」について、□の容認度は□より高い。「块」について、□の容認度は□、□より高い。一方、日本語では、「個」「つ」両方とも□、□、□、□に使われるが、「個」については、□、□の容認度は□、□よりやや高い。また、「個」「つ」の使用の個人差が大きい。本研究の結果も、類別詞言語の名詞がすべて物質名詞であるという主張の反論になる。

日本語と中国語の借用類別詞の形成メカニズムについて

陳奕廷

本発表は日本語と中国語の借用類別詞が、認知主体と対象との「相互作用フレーム」内の要素を参照点として形成されると主張する。借用類別詞は名詞や動詞から一時的に借用された「一口飯(one mouth rice)」における「口」のような計量類別詞(mensural classifier)のことを指す。相互作用フレームとは認知主体が道具を媒介として能動的に対象に対して行う相互作用を一つの理想認知モデルとして一般化したものであり、[Agent, Instrument, Action, Patient] という要素が含まれると考える。そして、借用類別詞は相互作用フレーム内のどの要素を参照点とするかによって三つのタイプに分けられる。

(1) Action を参照点とし、Patient を数える。

例：一截繩子(one cut rope)、一撮みの塩

(2) Instrument を参照点とし、Patient を数える。

例：一杯水(one cup water)、一袋の米

(3) Instrument を参照点とし、Action を数える。

例：打一拳(hit one fist)、三針縫う

借用類別詞は借用された動詞や名詞によってモノや動作を特徴付けるという点で特殊であり、フレームの背景知識を必要とする。

類別詞の意味拡張パターン —中国語・日本語間にみられる異同—

史春花

吉田康代

本研究は、中国語と日本語の具体物と抽象物の両方を数える個別類別詞 (水口 2004, Her & Hsieh 2010)に着目し、両言語の類別詞意味拡張のパターンと、それらの異同を解明する。

中国語類別詞の意味拡張には「独自派生型」と「元名詞義依存型」の二つがある。「独自派生型」とは、類別詞の抽象物を数える用法が、同じ類別詞の具体

物を数える用法から派生しているタイプで、類別詞間で行われる意味拡張である。一方「元名詞義依存型」とは、類別詞の抽象物を数える用法が、類別詞の由来元である同形の名詞の意味に依存して派生するタイプで、このタイプの類別詞は名詞と heterosemy (=異品詞多義語, Persson 1988, Lichtenberk 1991 を参照) をなし、名詞と類別詞という品詞の境を超えた派生を行う。

日本語類別詞には「元名詞義依存型」がなく「独自派生型」に近いもののみがある。すなわち、日本語の類別詞は類別詞間においてのみ意味拡張を行い、類別詞と名詞からなる heterosemy は日本語に見られないのである。